

山形浩生が選ぶ 経済がわかる

30冊

『要約 ケインズ
雇用と利子とお金の一般理論』(ホット出版) 刊行記念



山形浩生が選ぶ経済がわかる30冊

- 01—————04
クルーグマン教授の経済入門
 著：ポール・クルーグマン
 翻訳：山形浩生
- 02—————04
**入門経済思想史
 世俗の思想家たち**
 著：ロバート・L・ハイルブローナー
 翻訳：八木 甫、松原隆一郎、浮田 聡、
 奥井智之、堀岡治男
- 03—————04
**新装版 レモンをお金にかえる法
 “経済学入門”の巻**
 著：ルイズ・アームストロング
 絵：ビル・バツソ
 翻訳：佐和隆光
- 04—————04
**新装版 続・レモンをお金にかえる法
 “インフレ→不況→景気回復”の巻**
 著：ルイズ・アームストロング
 絵：ビル・バツソ
 翻訳：佐和隆光
- 05—————05
**ヤバイ経済学 [増補改訂版]
 悪ガキ教授が世の裏側を探検する**
 著：ステイヴン・D・レヴィット、
 ステイヴン・J・ダブナー
 翻訳：望月衛
- 06—————05
REMIX
ハイブリッド経済で栄える文化と商業のあり方
 著：ローレンス・レッシング
 翻訳：山形浩生
- 07—————06
評価経済社会
ぼくらは世界の変わり目に立ち会っている
 著：岡田斗司夫
- 08—————06
市場の倫理 統治の倫理
 著：ジェイン・ジェイコブズ
 翻訳：香西 泰
- 09—————06
テロの経済学
人はなぜテロリストになるのか
 著：アラン・B・クルーガー
 翻訳：藪下史郎
- 10—————07
市場を創る
バザールからネット取引まで
 著：ジョン・マクマラン
 翻訳：瀧澤弘和、木村友二
- 11—————07
海賊の経済学
見えざるフックの秘密
 著：ピーター・T・リーソン
 翻訳：山形浩生
- 12—————07
不道德な経済学
擁護できないものを擁護する
 著：ウォルター・ブロック
 翻訳：橘 玲
- 13—————07
**民主主義がアフリカ経済を殺す
 最底辺の10億人の国で起きている真実**
 著：ポール・コリアー
 翻訳：甘糟智子
- 14—————08
傲慢な援助
 著：ウィリアム・イースタリー
 翻訳：小浜裕久、織井啓介、富田陽子
- 15—————08
ルワンダ中央銀行総裁日記
増補版
 著：服部正也

- 16——08
ムハマド・ユヌス自伝
貧困なき世界をめざす銀行家
著：ムハマド・ユヌス、アラン・ジョリ
翻訳：猪熊弘子
- 17——08
「壁と卵」の現代中国論
リスク社会化する超大国とどう向き合うか
著：梶谷 懐
- 18——09
あなたの T シャツは
どこから来たのか？
誰も書かなかったグローバリゼーションの真実
著：ピエトラ・リボリ
翻訳：雨宮 寛、今井章子
- 19——09
クルーグマン ミクロ経済学
著：ポール・クルーグマン、
ロビン・ウェルス
翻訳：大山大道、石橋孝次、塩澤修平、
白井義昌、大東一郎、玉田康成、蓬田守弘
- 20——09
クルーグマン マクロ経済学
著：ポール・クルーグマン、
ロビン・ウェルス
翻訳：大山大道、石橋孝次、塩澤修平、
白井義昌、大東一郎、玉田康成、
蓬田守弘
- 21——09
高校生からの
マクロ・ミクロ経済学入門 II
著：菅原晃
- 22——10
コンパクトマクロ経済学
著：飯田泰之、中里 透
- 23——10
ゼロから学ぶ経済政策
日本を幸福にする経済政策のつくり方
著：飯田泰之
- 24——10
日本経済のウツ
著：高橋洋一
- 25——10
デフレ不況
日本銀行の大罪
著：田中秀臣
- 26——11
経済復興
大震災から立ち上がる
著：岩田規久男
- 27——11
日本はなぜ貧しい人が多いのか
「意外な事実」の経済学
著：原田 泰
- 28——11
環境危機をあおってはいけない
地球環境のホントの実態
著：ピョルン・ロンボルグ
翻訳：山形浩生
- 29——12
世紀の空売り
著：マイケル・ルイ
翻訳：東江一紀
- 30——12
パーキンソンの法則
著：C.N. パーキンソン
翻訳：森永晴彦

なんだかぼくの訳した本がやたらに多くなってしまったことはお詫びする。

——山形浩生

01 クルグマン教授の経済入門

著：ポール・クルグマン／翻訳：山形浩生
ちくま学芸文庫／1,300円＋税／2009年4月刊

ぼく個人にとってもこれは経済学と経済の実態とを結びつける重要な本だった。そして多くの人も、本書で「なぜ生産性が上がるかはよくわからない」と率直にクルグマンが認めてくれたことで、かなり救われたし、その後の本を選ぶ目も変わった。「こうすれば生産性が上がる!」と書いている本を見たら、即座に眉にツバをつけられるから。80年代アメリカについて書いた本ながら、その根本にある考え方は実に重要。経済学が何をどんなふう考えるか、それが現実経済の説明にどう使われるか、というのが理解できる。



02 入門経済思想史 世俗の思想家たち

著：ロバート・L・ハイムブローナー／
翻訳：八木甫、松原隆一郎、浮田聡、奥井智之、堀岡治男
ちくま学芸文庫／1,500円＋税／2001年12月刊

経済学者はすぐに、「ハイエクはこう言った」「ケインズはこう言った」とか言い始める。人によってはちゃんと大きな理論の枠組みをふまえるけれど、人によっては変な重箱の隅をつついて悦に入っている。また一方で、ごく一部の現象（たとえばリーマンショック）を見ただけで、経済学なんか全部ダメだとか極端なことを言う人もいる。一応、経済学というものが何を考え、どう発展してきたかを理解しておくのは大事。これは比較的バランスがとれている。



03 新装版 レモンをお金にかえる法 “経済学入門”の巻

著：ルイズ・アームストロング／絵：ビル・バツ／
翻訳：佐和隆光
河出書房新社／1,300円＋税／2005年5月刊

04 新装版 続・レモンをお金にかえる法 “インフレ→不況→景気回復”の巻

著：ルイズ・アームストロング／絵：ビル・バツ／
翻訳：佐和隆光
河出書房新社／1,300円＋税／2005年5月刊



さて経済学の中身に入ろう。この二冊、絵本だがばかにはしてはいけない。この本をちゃんと理解して人に解説できるくらいになったら、あなたは世のメディアに出てくる経済評論家の大半以上に経済学&経済を理解していることになる。需要と供給、自由競争、インフレや失業、重要なトピックは一通りカバーしている驚異の本。同じくマンガ経済学ながらも少し高度なものとしては、拙訳のパウマン『この世で一番おもしろいマイクロ経済学』（ダイヤモンド社）もどうぞ。



この世で一番おもしろいマイクロ経済学
 誰もが「合理的な人間」になれるかもしれない16講
 著：ヨラム・パウマン、グレディ・クライン／翻訳：山形浩生
 ダイヤモンド社／1,500円+税／2011年11月刊

05 ヤバイ経済学 [増補改訂版]

悪ガキ教授が世の裏側を探検する

著：スティーヴン・D・レヴィット、スティーヴン・J・ダブナー／翻訳：望月衛
 東洋経済新報社／2,000円+税／2007年4月刊

経済学というお金の話だとしか思っていない人がやたらに多いのだけれど、経済学的な知見を使って、お金以外で動く人のインセンティブを説明できるし、それがまた経済学の一部として認められる、という本。挙がっている例もわけがわからないものばかりだけれど、みんなちゃんと経済学の論文になっている。経済学はお金ばかり考えてはいけない、と説教したがる歳寄りに限って、本書をふざけていると論難するのだが、これぞお金以外のことを考えた経済学の最先端。



06 REMIX

ハイブリッド経済で栄える文化と商業のあり方

著：ローレンス・レッシング／翻訳：山形浩生
 翔泳社／2,200円+税／2010年2月刊

経済は、お金の取引だけで済む話ではないし、社会には必ずお金のからまない、お金がからんではいけない取引の部分がある。それは友情や愛情もそうだし、共有の文化や贈り物、宗教、多くの文化活動もそう。インターネット法学者として名高いレッシングが、共有贈与と文化経済と市場経済の関係まで踏み込んで考えた作品。アンダーソン『フリー』（NHK出版）などとも少し関連。



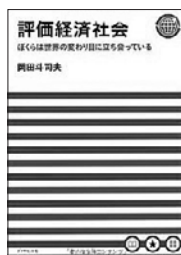
フリー 〈無料〉からお金を生みだす新戦略
 著：クリス・アンダーソン／監修・解説：小林弘人／翻訳：高橋則明
 NHK出版／1,800円+税／2009年11月刊

07 評価経済社会

ぼくらは世界の変わり目に立ち会っている

著：岡田斗司夫
ダイヤモンド社／1,500円+税／2011年2月刊

同じく、お金とは関係ないところで成立する経済社会の可能性を述べた本。ハント『ツイッターノミクス』でも似たような議論あり。非常に鋭いところをついて、経済理論としてはもう一歩踏み込んでほしいけれど知見は重要。



ツイッターノミクス TwitterNomics
著：タラ・ハント／翻訳：村井章子／解説：津田大介
文藝春秋／1,571円+税／2010年3月刊

08 市場の倫理 統治の倫理

著：ジェイン・ジェイコブズ／翻訳：香西 泰
日経ビジネス人文庫／857円+税／2003年6月刊

対話形式の書き方はいやらしいが、世の中は市場で整理すべき部分と政治的な規範で処理する部分とがあり、それを混ぜてしまうのはしばしば大きなまちがいだ、ということを書いた話で、上のお金以外の経済という点で重要な指摘をしている。



【品切重版未定】

09 テロの経済学

人はなぜテロリストになるのか

著：アラン・B・クルーガー／翻訳：藪下史郎
東洋経済新報社／2,000円+税／2008年7月刊

テロも、昔は貧乏だからやけになってやる、というのが定説だったが、実際に調べてみるとまったくちがう。人がテロをしたり、特に自爆テロまでやるときの理屈をきちんとしらべたおもしろい本。経済学といってもお金だけではないことを、これでさらに理解してほしい。

テロとの関連でポスト『戦争の経済学』（バジリコ）も是非。戦争も、経済原理では必ずしも動かない。一方で、それは経済に支配される。その二面性（いやそれ以上）を理解するのに好適。「戦争はいけません」とかいうお説教くささがなく、淡々と分析しているのが魅力。



戦争の経済学
著：ポール・ポスト／翻訳：山形浩生
バジリコ／1,800円+税／2007年10月刊

10 市場を創る バザールからネット取引まで

著：ジョン・マクミラン／翻訳：瀧澤弘和、木村友二
NTT出版／3,400円＋税／2007年3月刊

そうはいつでも市場経済は重要だ。でも、市場は勝手にできるものか？ それともきちんとケアをしないとイケない微妙なものなのか？ 答は、いろいろある。その「いろいろ」を描き、経済学ではしばしば黙って生まれてくるかのように描かれる「市場」をきちんと考えたよい本。むずかしいけれど、経済の背後にある「制度」というものの考え方のために。



11 海賊の経済学 見えざるフックの秘密

著：ピーター・T・リーソン／翻訳：山形浩生
NTT出版／1,900円＋税／2011年3月刊

逆に、制度が市場を規定するのではなく、市場が自分に最も適した制度を構築するのだ、という発想。いまは、制度が市場を創り、経済を規定するという発想が優位になっているのだけれど、その逆もある。制度と経済との関わり合いを考える中で、欠かせないけれど忘れられがちな考え方を、海賊という変な事例で見せてくれるおもしろい本。



12 不道徳な経済学 擁護できないものを擁護する

著：ウォルター・ブロック／翻訳：橘玲
講談社＋α文庫／838円＋税／2011年2月刊

一方で、市場や経済が何かを真に理解するには、ときには現実離れた極論も考えてみる必要がある。いまの経済学は基本的に、市場はすばらしいからあまり規制してはいけない、と言いつつ、一方では市場の暴走とかを心配して、ある程度の規制は必要だ、と言いたがる。たとえば、リーマンショックはしばしば「市場の暴走」「資本主義の暴走」と呼ばれる。でも本当だろうか？ まったく規制なしにしてみても、いやそのほうが世界はうまく動くかもしれない。売春もドラッグも汚職も公害も、すべて市場に任せて放置すると最適な結果になるかもしれない。本書はその極論を追求している。一見するとトンデモな主張ばかりだけれど、でもなぜそれが極論で実際にはダメかを説明するのは、実は思ったほど簡単ではない。



13 民主主義がアフリカ経済を殺す 最底辺の10億人の国で起きている真実

著：ポール・コリアー／翻訳：甘糟智子
日経BP社／2,200円＋税／2010年1月刊

一方で、市場のための制度というみんな、民主主義がいいと言い出すんだが、必ずしもそうでないことを指摘した問題作。下手に民主主義しようとして、しっかりしていない各種の市場制度を壊してしまうこ



とがあまりに多い。むしろ独裁を少し認めたほうがいいのでは？ これはアジアとの関連でよく言われること。

14 傲慢な援助

著：ウィリアム・イースタリー／翻訳：小浜裕久、織井啓介、富田陽子
東洋経済新報社／3,400円＋税／2009年9月刊

また、制度が重要といったって、そんなもの外から介入して作れないんだから言うだけ無駄、という立場もある。開発援助は、市場のための制度構築をしよう、というお題目にとらわれているけれど、そんなのは無駄だ、真の発展の原動力は別のところにある、というこれまた話題作。



15 ルワンダ中央銀行総裁日記 増補版

著：服部正也
中公新書／960円＋税／2009年11月刊

これまでの本を読むと、規制や政府の介入というのがうまくいかないかも、という気にさせられるが、これはそれがとてもうまくいった例。ODAの一環でルワンダ中央銀行の総裁にさせられた日銀の職員が、セオリー通りの立派な経済政策運営を行うことで国をたてなおすというすごい事例。中央銀行の役割とか、市場との対話とか、いまの日本銀行のやっていることとはかけ離れた立派な中央銀行のありかたを見せてくれる。



16 ムハマド・ユヌス自伝

貧困なき世界をめざす銀行家

著：ムハマド・ユヌス、アラン・ジョリ／翻訳：猪熊弘子
早川書房／2,000円＋税／1998年10月刊

貧困者の自立を助け、世界で一大旋風となったマイクロファイナンスの創始者ユヌスが、どうして貧乏人に少額融資という仕組みを思いついたか、なぜそれがうまくいくかも含めて述べた、感動的な本。



17 「壁と卵」の現代中国論

リスク社会化する超大国とどう向き合うか

著：梶谷 懐
人文書院／1,900円＋税／2011年10月刊

いま、世界の経済を考えるにあたり中国のことは無視できないと思うけれど、なかなか読みやすく明快な本がない。その中でこの本は、経済と社会と個人のからみあいの中にある多様な中国像を落ち着いた筆致で描いていて、大変勉強になる。多面的な見方、というただの優



柔不断の代名詞になりがちだが、これは本当の多面性を発揮できている珍しい例。狭い意味の経済の話だけではないけれど、ホントに経済は広い意味で理解しなければならないと思うので。

18 あなたのTシャツはどこから来たのか?

誰も書かなかったグローバリゼーションの真実

著：ピエトラ・リポリ 翻訳：雨宮 寛、今井章子
東洋経済新報社 / 2,000 円+税 / 2006 年 12 月刊

Tシャツ一枚が、ものすごい世界的な貿易の結果として生まれ、消えていくことを描いたおもしろい本で、グローバリズムへの安易な批判に対するアンチテーゼとしてどうぞ。



19 クルーグマン ミクロ経済学

著：ポール・クルーグマン、ロビン・ウェルス /
翻訳：大山道広、石橋孝次、塩澤修平、白井義昌、
大東一郎、玉田康成、蓬田守弘
東洋経済新報社 / 4,800 円+税 / 2007 年 9 月刊

20 クルーグマン マクロ経済学

著：ポール・クルーグマン、ロビン・ウェルス /
翻訳：大山道広、石橋孝次、塩澤修平、白井義昌、
大東一郎、玉田康成、蓬田守弘
東洋経済新報社 / 4,800 円+税 / 2009 年 3 月刊

読み物としておもしろい経済学教科書、というコンセプトで書かれた本書は、一般向けエッセイの名手クルーグマンの面目躍如の名教科書。厚いけれどすすい読めて勉強になります。



21 高校生からの マクロ・ミクロ経済学入門 II

著：菅原晃
ブイツーンソリューション / 1,400 円+税 / 2010 年 6 月刊

ミクロ、そして特にマクロ経済学の基本を非常に明快にまとめた本。簡単な数値例をたくさん使って明快に書かれた本で、高校生にもわかるだろうけれど、でも実はプロの経済学者でもときどきうっかりまちがえる内容がたくさん指摘されていて、非常に高度。日本のバカなベストセラー「経済書」のほとんどは、著者になで切りになされて死屍累々。著者のサイトと併せて読むべし。なぜIが再刊されないのか不思議。



22 コンパクトマクロ経済学

著：飯田泰之、中里 透
 新世社／1,800円＋税／2008年6月刊

マクロ経済学を一回勉強して挫折した人に特におすすめ。本当にコンパクトながら、重要なポイントをしっかりおさえている。アンチョコにも最適。



23 ゼロから学ぶ経済政策 日本を幸福にする経済政策のつくり方

著：飯田泰之
 角川 one テーマ 21 / 724円＋税 / 2010年11月刊

経済「学」についてあれこれわかって、それが経済を実際に動かすための政策とどう結びついているかはなかなかわかりにくい。新聞を見れば、経済政策とはこども手当とか TPP とか ナントカ課税とか 円高対策とか、そんな話になる。でもその善し悪しをどう評価判断すべきか？それがわかっている人は、世の経済評論家やエコノミストですら（いや実はかれらこそ）あまりいない。経済政策が何を考えるべきで、それに何ができるのか、そしてそれが経済学の理論とどう関連するのか、この本はかなりわかりやすく教えてくれる。



24 日本経済のウソ

著：高橋洋一
 ちくま新書 / 740円＋税 / 2010年8月刊

ある程度マクロ経済の理論がわかると、ここからの数冊の本はすいすいわかるはず。いまの日本がなぜずっとデフレのままで、円高でどんどん企業が外国に流出してしまうのにも何も対策がとられないか？そこにある、日本銀行と財務省の保身しか考えない政策（というか無策）を説明し続けているのが高橋洋一。かれの本はすべて読むに値するけれど、とりあえずこれを挙げておこう。



25 デフレ不況 日本銀行の大罪

著：田中秀臣
 朝日新聞出版 / 1,600円＋税 / 2010年5月刊

似た本が並ぶが、いまの日本の状況を理解するには好適。語り口で気に入ったのを選んでほしい。なお、同著者の『AKB48の経済学』はなかなかの奇書だが、変わったテーマに経済学を適用する試みとして、ちょっとのぞいてみてはいかが。



AKB48の経済学
 著：田中秀臣
 朝日新聞出版 / 1,200円＋税 / 2010年12月刊



26 経済復興 大震災から立ち上がる

著：岩田規久男
筑摩書房 / 1,200円+税 / 2011年5月刊

日本のデフレとそれを容認している日銀や政府を一貫して批判し続けた岩田規久男が、3.11 震災に対する提言として書いた本。いまはここに書いてあることがまったく実現していないのをひたすら嘆くための本となっているけれど、それでも経済学的にきちんと震災をどう考えるか、というよい見本であり、またそのためにもデフレ脱出で成長できる経済を日本が取り戻すべきだ、ということがよくわかる。岩田規久男の本も、はずれは一冊もない。



27 日本はなぜ貧しい人が多いのか

「意外な事実」の経済学

著：原田泰
新潮選書 / 1,200円+税 / 2009年9月刊

原田泰は、常に各種の経済問題について平易で穏健ながらも鋭い指摘と提言を続けてきた人。年金制度、人口減少の影響等々、多くのマスコミで見かける通説を次々にきちんとデータで否定し、正しい認識を教えてくれて大変勉強になる。原田の他の本もすべておすすめ。



28 環境危機をあおってはいけない

地球環境のホントの実態

著：ピョルン・ロンボルグ / 翻訳：山形浩生
文藝春秋 / 4,500円+税 / 2003年6月刊

この本は、世の中で言われている「環境問題」なるものは数十年単位で見ると着実に解決されている、と述べる。人は目先の問題にとらわれがちだし、センセーショナルにあおりたがるマスコミはすぐに一時的な現象と憶測だけで大騒ぎする。トレードオフに基づいて優先順位をつけようという話。本書は環境団体にはものすごく嫌われたし、特に地球温暖化について経済学的に筋の通らない京都議定書などの無意味な活動をやめようと提案したことで大バッシングにもあった。

でも刊行から十年たって、本書の主張はまったくまちがいが見つからないばかりか、かつては口を極めて罵倒していた人々が、だんだん自説を撤回してロンボルグの主張に同意するようになっていく。経済学的に筋の通った議論がいかにも力を持ち、実際の問題解決にも役立つかを示す見事な例。本書が分厚すぎるなら、温暖化だけに議論をしぼったロンボルグ『地球といっしょに頭も冷やせ!』(ソフトバンククリエイティブ)、温暖化問題を他の地球的な問題と比較したロンボルグ『五〇〇億ドルでできること』(バジリコ)をどうぞ。



地球と一緒に頭も冷やせ!

温暖化問題を問い直す

著：ピョルン・ロンボルグ / 翻訳：山形浩生
ソフトバンククリエイティブ / 2,000円+税 / 2008年6月刊



五〇〇億ドルでできること

編：ビョルン・ロンボルグ／翻訳：小林紀子
バジリコ／1,600円+税／2008年11月刊

29 世紀の空売り

著：マイケル・ルイス／翻訳：東江一紀
文藝春秋／1,800円+税／2010年9月刊

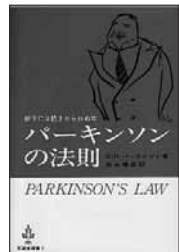
最近、『マネーボール』映画化で人気が出ているルイスの最近の作品で、リーマンショックをおもしろい視点で描いた本。世界中がドツボに落ちたリーマンショックで、かえって儲けた人はだれか？ そこから、リーマン問題やサブプライム問題がどんなシロモノで、なぜあんなことが起きたのか、ほとんどサスペンス仕立てでわかるよい本。



30 パーキンソンの法則

著：C.N. パーキンソン／翻訳：森永晴彦
至誠堂選書2／1,000円+税／1996年11月刊

最後にほとんど番外編。世の中は、経済だの理屈だのでは動かず、卑しい組織力学で動くのよ、というのをイギリス人らしい冷笑的な筆致で描く、冗談でありながらシリアスな本。読むと身の回りに思い当たる事例が山ほどあるはず。



『要約 ケインズ 雇用と利子とお金の一般理論』 山形浩生解説 (抜粋)

というわけで、『一般理論』を一通りまとめたから、あとはみんな読んで勉強してね……といたいところだが、みなさんの横着ぶりはよく知ってる。それに、『一般理論』は当時の経済学者を主な読者として、当時の世界経済の状況の中で書かれたものだ。その中で、いろんなことをやろうとしているので、結構とっちらかっ

ていて、パッと通読してわかるものじゃない。
そのうえ、ケインズ経済学は、その後いろいろ歴史的にもまれている。本書が出たあとの話も書いておく必要があるだろう。そして、それをなるべくバイアスのない形でやっておく必要がある。実はケインズの専門家に解説をお願いすると、その人の志向にひきずられてかなりバイアスが生じかねないし、狭い業界的な配慮も入り込みかねない。というわけで、ぼくが少しやってみよう。

1 ケインズってだれ?

そもそものケインズについては、伝記や解説書はやまほど出ているので、詳しくはそちらを見てほしい。どれでもいい。でもかれについて本当に知っておくべきことはごくわずか。

ジョン・メイナード・ケインズ (1883-1946) は、イギリスの大経済学者だ (知的業績のみならず、身長190センチ超のホントに大経済学者だったとか)。マーシャルの弟子として当時の主流経済学を身につけ、第一次世界大戦後には官僚としてパリ講話会議に参加、ドイツに過大な戦後賠償を課すことが誤りだと指摘した。投機家として大損したり大もうけしたり、享樂的な遊び人の面も持ち、政治的なたちまわりもうまく、弁が立ってあれこれ論戦も繰り広げて、エピソードには事欠かない。

でも、かれについて本当に知るべき唯一のことは、ここに紹介した『雇用と利子とお金の一般理論』を執筆して、経済学にまったく新しい考え方を持ち込み、理論面ばかりかその後の世界経済運営まで一変させてしまった、ということだ。

で、この『一般理論』には何が書いてあるのか?

2 ケインズは『一般理論』で何をしようとしたのか?

2.1 それまでの経済学とは:基本は放置プレイの古典派経済学

「はじめに」を読んでもわかるように、この『一般理論』はそれまでの古典派経済学に対する反論、またはその拡張として書かれている (古典派と新古典派の区別はこ

ここでは重要でないので無視)。ケインズはその古典派の伝統の中で教育を受け、それを熟知していたが故に、その欠点もよくわかっていた。では、それまでの（そして今もある）古典派経済学って何だろうか？

古典派は、経済学の開祖とされるアダム・スミスが考案し、その後リカードが定式化したものだ。こんな本を読もうという人ならご存じかもしれない。アダム・スミスは「見えざる手」という話をした。市場の取引があれば、人々が自分の一番得意なことに集中して、自分の利潤を利己的に追求することで、万人にとっていちばんよい結果が出る。価格メカニズムを通じて需要と供給が均衡し、あらゆるものが無駄なく使われる、という話だ。

そして、ここから出てくる経済学の処方箋は基本的に一つ。すべてを強欲な人々の利潤追求と強欲さにゆだね、それらが相互作用する自由な市場の働きにまかせなさい。政府は基本は何もするな。余計な規制はかえって社会をだめにする。市場に任せるのがいちばんいい！

さて、これを弱肉強食だとか嘆かわしい強欲肯定で倫理がないとか、いささかピント外れな文句を言う人もいる。だが、市場に任せただけがいいという議論は、ほとんどの場合には正しい。その意味で、経済学という学問は、実は出発時点で答えが9割は出てしまっている。その後の経済学は、残り一割の、市場がうまく機能しない例外的なケースをあれこれつづきまわしているだけだとさえいえる。

他の学問でもそういうことはある。世の中のほんどはニュートン力学で用が足りる。アインシュタイン理論を持ち出す必要のある場面なんかこの地上にいる限りほとんど生じない。

だが経済学だと、物理学とはちがう面がある。人々が経済学にすがりたいのは、まさにその自由放任ではすまない場合だ、ということだ。人々が求めているのは、何もしないことの正当化では（必ずしも）ない。中古車がなぜかまったく売れない。それはなぜだろう？ ある地域で、不動産がやたらに売れ残っている。なぜだろう？ 失業者が大量にいて、いっこうに減らない、なぜだろう？ 放任で事態が改善されないからこそ、経済学の知見が求められる。

そしてその最大のケースが、不景気とか不況とか呼ばれる状況だ。

2.2 不景気って何？

不景気の正式な定義というのはある。経済が数期続けてマイナス成長したら不景気だ。でも、そうした形式的な定義よりも重要な不景気の特徴がある。

不景気の特徴づけるのは、大量の失業だ。失業というのは、人だけじゃない。不景気では、モノが売れない。大量の商品が消費されずに倉庫にたまる。工場の機械はストップしたまま。家やオフィスは借り手や買い手がつかず、空き家のまま。そしてもちろん、多くの人が雇用されずに失業する。

なぜ市場が機能しないんだろう。古典派はこれが説明できない。売れなければ値段が下がって需給はすぐにマッチし、不景気が長い間続くなんてことはあり得ないはずだ。でも、実際に不景気は長いこと続く。その不景気について古典派経済

学が主張できた処方箋は、極論すればおおむね次の三つになる。

1. 待て。あれこれ調整に時間がかかってるだけ。長期的には市場メカニズムが機能して、いずれ完全雇用に戻る。
2. 規制をなくせ。政府が市場の自由な働きを妨害してるんだらう。規制を緩和しろ。
3. 組合やカルテルが悪い。市場の価格調整メカニズムを妨害してる連中がいる。賃下げを阻止する労働組合とか、商品価格をつり上げようとするカルテルとか。そういうのをつぶせ。

なんだか、全部最近の日本の処方箋として声高に言われてるものに思えるだろう。でも、これはどう見ても十分な答えではなかった。

いま失業して苦しんでいる人々は、待てといわれて、はいそうですかとは言えなかった。こういう話が大きく問題になるまでに、その人たちはすでに数年も苦労を強いられている。「いずれ」っていつよ？ またそれに突き上げられる政府だって、待ててくはないがいつまで、というのがある。古典派はそれに答えられなかった。また規制にもいろいろある。どの規制が重要なのか？ それに不景気の常として、昨日まであまり問題でなかった規制が、なぜ今日は突然影響するのか？ これもわからない。組合やカルテルだって話は同じだ。それに、価格調整はいろんな形で起こる。たとえば経済がインフレになれば、賃金は同じでも価格調整は起こる。でも組合はそんなのには反応しない。なんか変では？

特に1930年頃の、ウォール街大暴落を発端とする世界大恐慌ではこれが顕著だった。失業はどこを見ても続き、職をくれるなら半値でも働く、なんて人はどこにでもいた。どっかの悪い組合やカルテルが価格をつり上げてるなんて話ではない。待っている間に企業は倒産し、人々はどんどん自殺する。

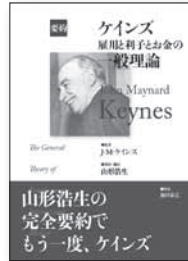
これに対して、「陳腐化した企業がどんどん破産して退出するのはいいこと、ゾンビ企業はつぶれて優秀な企業だけ残ればいいのだ」なんてことを言う人もいた(今もいる)。でも、企業はさておき、人は？ だめなやつは首をくくって当然、ゾンビ労働者はあの世に退出願って優秀な人だけ残れ、なんてことはいえない。

ケインズは、そうした古典派経済学の無力を理解していた。実際に新古典派理論でまったく説明のできない大量失業が長いこと起きていて、それがいっこうに解消しないのも見ていた。一方でかれは、新古典派理論を十分に身につけており、それが時に正しいことも知っていた。古典理論に不足しているものは何だろう。現実をきちんと説明でき、しかもそれに対する有益な処方箋も下せるような理論は何だろうか？ 人々がすでにかなり長いこと苦しんでいるのに「長期的にはよくなる」しか言えないのでは意味がない。そういう主張をする古典派経済学者に対し、ケインズは「長期的には、われわれみんな死んでいる」とやりかえした。みんなが死ぬ前に何かしないと。ケインズはそれを考案しようとした。

その結果がこの『一般理論』だった。

山形浩生 (やまがた・ひろお)

評論家・翻訳家。マサチューセッツ工科大学不動産センター修士課程修了。調査会社勤務の傍ら、幅広い分野で翻訳・執筆活動を行なう。本書のほか、『訳者解説』(バジリコ) など著書・翻訳多数。



要約 ケインズ 雇用と利子とお金の一般理論

原著●J・M・ケインズ

要約・翻訳●山形浩生

解説●飯田泰之

定価●1,500円＋税

ISBN978-4-7808-0171-2 C0033

B6判 / 272ページ / 並製

[2011年11月刊行]

●『要約一般理論』目次

能書き 山形浩生 / 序文 / 第I巻：はじめに / 第II巻：定義と考え方 / 第III巻：消費性向 / 第IV巻：投資をうながす / 第V巻：賃金と価格 / 第VI巻：一般理論が示唆するちょっとしたメモ / 解説 飯田泰之 / 訳編者解説 山形浩生 / 1 ケインズってだれ? / 2 ケインズは『一般理論』で何をしようとしたのか? 2.1 それまでの経済学とは：基本は放置プレイの古典派経済学 2.2 不景気って何? / 3 一般理論の主張とその活用 3.1 一般理論のキモ：財や労働の需要が、お金の需給に左右される! 3.2 IS-LM理論 / 4 ケインズ経済学の興亡 4.1 ケインズ経済学黄金時代とその崩壊 4.2 古典派経済学の逆襲 4.3 ニューケインジアン / 5 リーマンショックとケインズの復活 / 6 『一般理論』と経済学の未来 6.1 ケインズのご利益とは 6.2 経済学の未来? / 7 謝辞

『要約 ケインズ 雇用と利子とお金の一般理論』(ポット出版)刊行記念 山形浩生が選ぶ経済がわかる30冊

文●山形浩生

2012年1月2日発行

制作 / 発行●ポット出版

150-0001 東京都渋谷区神宮前2-33-18#303

電話 03-3478-1774 ファックス 03-3402-5558

<http://www.pot.co.jp/>

books@pot.co.jp

本文用紙●上質再生紙 / 90kg
仕様書体●游明朝体 游明朝体36ボかな
游ゴシック体 游築見出し明朝体
Garamond Frutiger
2012-0101-2.0